

『舞踏会』を読む

野村圭介

芥川龍之介は、その短い生涯の間に、数多くの名作を残したが、中でもこの『舞踏会』は、形式内容共に、もっとも充実した短篇の一つ、まことに珠玉の名品と呼ぶにふさわしい作品と行って過言ではなからう。

筆者は以前、担当の教養ゼミナールにおいて、芥川好きの学生たちと一緒に、ゆっくりと暇をかけてこの短篇を読む時間を持った。それは、一行読んでは立止り、二行読んでは好き勝手なことを言い合うといった、まことに自由な、楽しい読書の時間だった。その折の楽しい気分、久方振りで読んだ『舞踏会』読後の「愉快な興奮」(この言葉はほかならぬ『舞踏会』の最終節に出てくるのだが)が忘れられないままに、いつか機会があれば一篇の書き物にまとめてみたいものだと思っていた。しかし、肩肘張った論文ではつまらない。せっかくの読後の愉快な気分を、台無しにしてしまうだけだ。既に秀れた論考もいくつかある。屋上屋を架するだけでは、わざわざ苦勞して筆を取るにも及ぶまい。と思いきう思っている頃、偶々眼に触れたのがロラン・バルト Roland Barthes の『S／

Z』であった。

なるほど、こんな方法もある。これなら、あまり無理——とはすなわち、論理的整合を追う余りに、作品の細部の豊かさ、真の読書の楽しみを犠牲にすることだが——をしなくてすみそうだ。いくらかでも、教室の、自由な楽しい読書の雰囲気を再現できるかもしれない。といったわけで、バルトのひそみに倣い、『舞踏会』全文を六十四に分かつて（分節の仕方は恣意的である。個々の意味を読み取るのに便利な長さに自由に裁断した。したがって、必ずしも句点をもって分断されていない）そっくりそのまま掲げ、これに勝手気儘な注釈をつけることにしたのである。なお、テキストは『芥川龍之介全集第三卷』（一九七七年、岩波書店）に依った。

(1)

—

明治十九年十一月三日の夜であった。当時十七歳だった——家の令嬢明子は、

◆作者はこの作品の女主人公に明子という名を与えた。用意周到な命名と言わねばならない。明子という名を得て、始めて作者は、それまで漠然としていたヒロイン像が、一挙に肉体を得て鮮やかに定着するのを覚えたに違いない。A-KI-KO——もっとも明るく開放的な母音Aをまず冒頭に大きくくびかせ（母音の開きは、唇の開放、官能の開放である、とロラン・バルトなら言うところだろう）、ついで、KIの音が、硬く鋭く清新に、ちょっぴり知的なひびきを伝え、最後にKOと、あたたかく落着いた音でしめくられる。明治十九年十七歳明子——明子の明が、またほかならぬ明治の明であり、文明開化の明であることは言うをまたないだろう。ちなみに、明の字のつく熟語を思いつくままにあげてみようか——明朗、明敏、明確、明察、明晰、明眸、明星、あるいはまた、賢明、簡明、言明、聡明、表明、分明、黎明……ヒロインはつまり、明治のごく当初に誕生したわけだが、明子という名前、今

日では至極平凡なこの名前が、当時にあつては、ごくごく稀なものであつたろうことは、容易に想像がつく。彼女と同世代の女たち、たとえば作者芥川自身の実母名はフク、その姉妹はフキ、フユ。あるいは志賀直哉の母は銀、義母は浩（ひろ）。ということはつまり、明子という名が、いかに作者の強烈な創作意識のたまものであるかがわかる。

(2) 頭の禿げた父親と一しょに、今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上って行った。

◆始めての舞踏会、華やかな鹿鳴館での舞踏会。ヒロインが父親に伴なわれて登る階段は、とりもなおさず未知への階段、新しい展望への階段、新しい人生への階段である。◆「頭の禿げた父親」というのは、必ずしも取るに足りない情報ではない。禿頭は、何か精力的なもの、エネルギー的なもの、明朗闊達なものの、またあえて言えば、どこか新興貴族的なもの、成金的なものを暗示しないでもない。

(3) 明い（が）瓦斯（す）の光に照らされた、幅の広い階段の両側には、殆人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬（まがき）を造つてゐた。菊は一番奥のがうす紅（べに）、中程のが濃い黄色、一番前のがまっ白な花びらを流蘇（ふさ）の如く乱してゐるのであつた。

◆ヒロインが登る階段のクローズアップ。◆菊——冒頭で鮮やかにまた華麗に提示された菊の花は、以後くり返し折に触れて現れ、この作品の基調を形成するイメージの一つとなる。◆「殆人工に近い大輪の菊の花」は、舞踏会の最後の場面で夜空に咲開く、文字通りの人工の大輪の菊の花すなわち花火と、遠く照応し、花火の出現を遠くから準備している。

(4) さうしてその菊の籬の尽きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽気な管弦楽の音が、抑へ難い幸福の吐息のやうに、休みなく溢れて来るのであった。

◆一見客観的な描写、物語の語り手の立場からの第三者的な描写のようであるが、舞踏室から聞える音楽をいち早くとらえるのは、明子の耳であり、それを「陽気な」もの、「抑へ難い幸福の吐息」と感じるのは、始めての舞踏会への期待に胸を高鳴らす明子である。すなわち右の一文は、明子の視点からのもの。◆以上(1)から(4)までが第一段落である。明暗の交錯、明るいイメージと暗いイメージとの微妙な混交、それがこの作品の奥行きを深くし、魅力の一つともなっているのであるが、第一段落を領しているのは、あくまでも明のイメージである。令嬢明子、頭の禿げた父親、明るいガスの光に照らされた階段、さらには、うす紅と黄色とまっ白な菊の花びら、休みなく溢れてくる陽気で、幸福の吐息のような楽の音。

(5) 明子は夙に仏蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた。が、正式の舞踏会に臨むのは、今夜がまだ生れて始めてであった。

◆最初の舞踏会とは、深窓に育った少女にとって、一人立ちへの、自らの人生への出発点にはかならない。大人への第一歩、社会との、つまり他者との出会いへの第一歩である。◆明子の教育のすべてはこの日のためにあった。これまでの十七年間は、この晴れの日のための、人生への門出のための準備期間だった。◆「仏蘭西語」は、後段における、仏蘭西の海軍将校の登場を、より自然に、より容易にならしめる。

(6) だから彼女は馬車の中でも、折々話しかける父親に、上の空の返事ばかり与へてゐた。それ程彼女の胸の中に

は、愉快なる不安とでも形容すべき、一種の落着かない心もちが根を張ってゐたのであった。

◆明子一人で鹿鳴館へ向うのではない。人生の出発点まで子を導くことは、親（保護者）の大切な役目の一つである。◆親は子を気づかって言葉をかける。が、新たな出発を目前にひかえた子は、期待と不安の交錯の中で、返事らしい返事を与えることができない。

(7) 彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何度いら立たい眼を挙げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい灯火を、見つめた事だか知れなかった。

◆刻一刻と近づきつつある、まばゆいばかりの光に満ちているであろう未知の舞踏会場を思い描いて胸を高鳴らす明子にとって、窓外に流れる夜景、彼女には既知のものである東京の夜の景色は、ことさらに貧相に薄暗く感じられたに相違ない。が、事実また、当時のいまだ黒々とした東京の夜の中にあつて、鹿鳴館の占める一郭^{かく}のみは、異様に明るい空間だった。その光を求めて、明りにすい寄せられて、着飾った紳士淑女が集い、舞い踊った。後段、語り手は、鹿鳴館の踊り手を描写するにあたって、「目ぐるましい動揺」とも「まるで大きな蛾が狂ふやうに」とも記している。◆(5) (7)が第二段落。この作品は終始時間と共に、時間の進行を追隨して進展するが、唯一の例外が、冒頭の階段の場面に時間的に先行するこの馬車の中の一場景である。第一段落の明に對立し、それをよりきわだたせる、第二段落の暗。薄暗い車中と夜の町の乏しい灯火。そしてまた、明子の不安。

(8) が、鹿鳴館の中へはひると、間もなく彼女はその不安を忘れるやうな事件に遭遇した。と云ふのは階段の丁度中程まで来かかった時、二人は一足先に上って行く支那の大官に追ひついた。すると大官は肥満した体を開

いて、二人を先へ通らせながら、呆れたやうな視線を明子へ投げた。

◆明子は、一刻も早く、陽気な管弦楽の音がそこからあふれ出てくる舞踏室に足を踏み入れたい。その先を急ぐ氣持が、おのずから彼女の足を早め、先に乗って行く支那の大官に追いつき、彼を追いつ越して行く。◆悠然と歩む中国人と、追いつき追いつ越せの日本人。◆ヒロインは、男性の「呆れたやうな視線」を浴びて、始めて己れの美しさを自覚する。美の自覚は力の自覚でもある。彼女は自信を得、同時に、不安は解消する。少女は自己の美を認識することで大きく大人へと脱皮をとげる。つまりこれは少女にとって一つの「事件」である。

(9) 初々しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髪に勾つてゐるたった一輪の薔薇の花——實際その夜の明子の姿は、この長い弁髪を垂れた支那の大官を驚かすべく、開化の日本の少女の美を遺憾なく具へてゐたのであった。

◆明子はバラの花。いま開化したばかりの、ういういしいバラ、一輪の匂いたつバラの花である。◆バラは西洋種の花である。欧風の教育をうけ、西洋人のようにはきはきとして、明朗活潑な明子。◆菊とバラ——ヒロインが今上って行く階段も、やがてそこに入る舞踏室も、いたる所菊の花々で埋まり、菊の香りがたちこめている。その菊の中にあって、彼女のみが一輪のバラ。◆「水色のリボン」——水の要素。

(10) と思ふと又階段を急ぎ足に下りて来た、若い燕尾服の日本人も、途中で二人にすれ違ひながら、反射的にちよいと振り返って、やはり呆れたやうな一瞥を明子の後姿に浴せかけた。それから何故か思ひついたやうに、白い襟飾へ手をやって見て、又菊の中を忙しく玄關の方へ下りて行った。

◆(10)は(8)のバリエーションである。明子の美の確認。◆菊の花。

(11) 二人が階段を上り切ると、二階の舞踏室の入口には、半白の頬鬚を蓄へた主人役の伯爵が、胸間に幾つかの勲章を帯びて、路易十五世式の装ひを凝らした年上の伯爵夫人と一しょに、大様に客を迎へてゐた。明子はこの伯爵でさへ、彼女の姿を見た時には、その老獪らしい顔の何処かに、一瞬間無邪気な驚嘆の色が去来したのを見のがさなかった。

◆(11)もまた、(8)および(10)のバリエーションである。明子の美の再認。◆すでに自らの魅力を自覚して自信を得ている明子は、己れの美が人に及ぼす威力を、興がって楽しむだけの落着き、冷静さを獲得している。◆伯爵の「老獪らしい顔」と、そこに一瞬浮かんだ「無邪気な驚嘆の色」とのアンバランスの面白さ。◆「路易十五世式」——フランス。

(12) 人の好い明子の父親は、嬉しさうな微笑を浮かべながら、伯爵とその夫人とへ手短に娘を紹介した。

◆親は最後の役目を履行する。人生の入口（舞踏室の入口）まで、常に子につきそって来た親は、社会の、他者の代表（伯爵夫妻）に子を紹介し、子を認知させてその役目をすべて完了した。子はもはや一人旅立つしかすべはない。

(13) 彼女は羞恥と得意とを交る／＼味った。が、その暇にも権高な伯爵夫人の顔だちに、一点下品な気があるのを感じただけの余裕があった。

◆女の競争心、対抗心——自らの美に目覚めて、たちまち一箇の女性に成長した少女は、同時にまた他の女たちの

美に対しても敏感になる。彼女は本能的に、己れの魅力と他者のそれとを、比較較量せんとする。

(14) 舞踏室の中にも至る所に、菊の花が美しく咲き乱れてゐた。さうして又至る所に、相手を待ってゐる婦人た

ちのレエスや花や象牙の扇が、爽やかな香水の匂の中に、音のない波の如く動いてゐた。

◆菊の花。階段と同じく、舞踏室もまた菊に埋っている。◆華やかな会場を領した、「爽やかな香水の匂ひ」と菊の香り。明子が、匂い立つ一輪のバラの花であつたことを思い出そう。◆「音のない波」——水のイメージ。

(15) 明子はすぐに父親と分れて、その綺羅びやかな婦人たちの或一団と一しよになった。

◆親(保護者)との訣別。◆すでに己れの力を十分に自覚した明子は、喜々として他者の中に入って行く。が、「すぐに」という副詞は、彼女の活発大胆さを、ないしはいささかの無鉄砲さを暗示しないでもない。

(16) それは皆同じやうな水色や薔薇色の舞踏服を着た、同年輩らしい少女であつた。彼等は彼女を迎へると、小鳥のやうにさざめき立って、口々に今夜の彼女の姿が美しい事を褒め立てたりした。

◆明子の美の再認。(8)の「呆れたやうな視線」、(10)の「呆れたやうな一瞥」、(11)の「無邪気な驚嘆の色」の三者によつて、無言のうちに讃えられたヒロインの美しさは、今、多数の者によつて一斉に、言葉でもって讃美をうける。

◆明子のスター性。鶏群の一鶴。◆「水色」——水の要素。

(17) が、彼女がその仲間へはひるや否や、見知らない仏蘭西の海軍将校が、

◆これまで、ごくひそやかに伏在していた水の要素、水に関連したイメージ（「水色のリボン」、「水色の舞踏服」、「音のない波」、またして言えば(4)の「溢あふれて来る」、(7)の「流れて行く」という表現など）が、ここに来て、「海軍将校」として、一箇の人物の形をとって顕在化する。彼の登場と共に、この作品の中には、次第に多量の水が、（熱をさます）冷たい水が注ぎこまれることになる。

(18) 何処からか静に歩み寄った。

◆物静かな人、海軍将校。

(19) さうして両腕を垂れた儘、丁寧に日本風の会釈をした。

◆努めて日本の習慣に同化しようとする、士官のやさしさ、神経の繊細さ。

(20) 明子のかすかながら血の色が、頬に上って来るのを意識した。

◆明子の羞恥と喜び。◆赤みをさした頬は、まさしく匂いたつバラの花。

(21) しかしその会釈が何を意味するかは、問ふまでもなく明かだった。だから彼女は手にしてゐた扇を預って貰ふべく、隣に立ってゐる水色の舞踏服の令嬢をふり返った。

◆頬を染めた、バラ色の舞踏服の明子が、隣に立つ水色の服の少女を振りむいて、扇を手渡す。——一幅の美しい絵、色彩の対称の妙。◆「水色」——水の要素。

(22) と同時に意外にも、その仏蘭西の海軍将校は、ちらりと頬に微笑の影を浮べながら、◆ 静かな人、海軍将校は、また微笑の人でもある。が、右の文で単に微笑と言わず、「微笑の影」とあるのは、その頬笑みにわずかな翳りを、一抹の淋しさをつけ加える。

(23) 異様なアクサンを帯びた日本語で、はっきりと彼女にかう云った。

「一しよに踊って下さいませんか。」

◆ (23)は(19)のバリエーション。◆ 「はっきりと」は、彼女とぜひとも踊りたいという士官の意志、ひいては彼の率直性を示す。

(24) 間もなく明子は、その仏蘭西の海軍将校と、「美しく青きダニウブ」のヴァルスを踊ってゐた。

◆ 海軍将校が、明子をリードして踊る曲は、水の人である彼にふさわしく「美しく青きダニウブ」。◆ (23)と(24)の間には(岩波版全集、全十二巻、一九七七年)一行の空白がある。なお、本によつては(例えば、角川書店、日本近代文学大系芥川龍之介集、一九七〇年)(23)と(24)の間に空白を置かないものもある。このテキスト上の問題点に関する注釈は、いまだ瞥見するに至らない。

(25) 相手の将校は、頬の日に焼けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭のある男であつた。

◆ 士官の繊細な神経、感傷的な性向と対照的な、外見の健康、男性的風貌。

(26) 彼女はその相手の軍服の左の肩に、長い手袋を嵌めた手を預くべく、余りに背が低かった。が、場馴れてゐる海軍将校は、巧に彼女をあしらって、軽々と群集の中を舞ひ歩いた。さうして時々彼女の耳に、愛想の好い仏蘭西語の御世辞さへも囁いた。

◆数多の舞踏の（愛の、人生の）経験者である海軍士官。◆士官の言語挙措の如才のなさ、穏和さ。——やがて次第に明らかになる彼の内面の、苦い認識、冷たい認識とは裏はらに、あるいはそれ故になおのこと。◆甘い、愛の言葉としてのフランス語。しかしまた、彼の即席の日本語力では、お世辞を囁くことは不可能だろう。

(27) 彼女はその優しい言葉に、恥しそうな微笑を酬いながら、時々彼等が踊つてゐる舞踏室の周囲へ眼を投げた。◆舞踏の（愛の、人生の）*débutante* 初心者である明子。◆明子の羞恥。が、彼女は単に恥ずかしがってばかりいないで、既に微笑をもつて相手に応じている。もっとも微笑は、幾分かはフランス語の意味がよく解せないためでもあろう。◆明子は、初心者としては、意外と落着いており、冷静である。そして好奇心に富む。踊りながらも、時に彼女は、始めて臨む舞踏会場の様子を観察しようとする。とはいえしかし、「周囲へ眼を投げ」るのは、この場合明子というよりむしろこの物語の語り手であらう。鹿鳴館の華麗な舞踏会の有様を、描写してみたい語り手であらう。

(28) 皇室の御紋章を染め抜いた紫縮緬の幔幕や、爪を張った蒼龍が身をうねらせてゐる支那の国旗の下には、花瓶々々の菊の花が、或は軽快な銀色を、或は陰鬱な金色を、人波の間にちらつかせてゐた。しかもその人波は、三鞭色のやうに湧き立って来る、花々しい独逸管弦楽の旋律の風に煽られて、暫くも目ぐるましい動揺を止め

なかった。明子はやはり踊ってゐる友達の一人と眼を合はすと、互に愉快さうな頷きを忙し^せいの中に送り合つた。が、その瞬間には、もう違つた踊り手が、まるで大きな蛾が狂ふやうに、何処からか其処へ現れてゐた。

◆菊のイメージ——皇室の紋章を染めぬいた幔幕。花瓶々々の菊の花。◆水の要素——二度にわたる人波、湧き立つシャンペン、蒼竜（水に関連した青のイメージ）。◆踊りながら、友達と頷きを交す明子の、満足と余裕。

(29) しかし明子はその間にも、相手の仏蘭西の海軍将校の眼が、彼女の一举一動に注意してゐるのを知つてゐた。

◆海軍将校は（本質的に）眼の人である。醒めた人、観察者、傍観者である。◆相手の眼を意識する明子。彼女の敏感、聡明、落着き。

(30) それは全くこの日本に慣れない外国人が、如何に彼女の快活な舞踏ぶりに、興味があつたかを語るものであつた。こんな美しい令嬢も、やはり紙と竹との家の中に、人形の如く住んでゐるのであらうか。さうして細い金属の箸で、青い花の描いてある手のひら程の茶碗から、米粒を挟んで食べてゐるのであらうか。

◆海軍将校の明子への興味。彼の感じる快いギャップ——想像の中にあつた日本娘と眼の前の少女との懸隔。明子はつつましやかな、人形のような日本娘ではなく、活発明朗な美しい少女である（彼女が西洋種の花であるバラであつたことを思い出そう）。◆「青い花」——青のイメージ。

(31) ——彼の眼の中にはかう云ふ疑問が、何度も人懐かしい微笑と共に往来するやうであつた。

◆眼の人、海軍将校。同時にまた、彼は常にやさしく頬笑む人でもある。

③② 明子にはそれが可笑しくもあれば、同時に、又誇らしくもあった。だから彼女の華奢な薔薇色の踊り靴は、物珍しそうな相手の視線が折々足もとへ落ちる度に、一層身軽く滑な床の上を這って行くのであった。

◆お茶目な明子——彼女の余裕、自信。パートナーの視線（眼の人である海軍将校）に己れの美の反映を読みとって誇らしく感じる明子。◆明子の軽快さ、敏捷性。士官が静とすれば、彼女は動である。◆「薔薇色の踊り靴」——バラの花である明子の再確認。

③③ が、やがて相手の将校は、この児猫のやうな令嬢の疲れたらしいのに気がついたと見えて、

◆「児猫のやうな」という形容は、幾分異様な感じを与える。何か、冷やかな残酷な感じを与える。一瞬明子が、冷たくつきはなされた感じがする。もともとこの表現は、芥川がこの短篇を書くに当って参考とした、ピエール・ロチ *Pierre Loti* の『秋の日本』*Japonerie d'Automne* から取られたものだが……

③④ 舐るやうに顔を覗きこみながら、

「もっと続けて踊りませうか。」

「ノン・メルシイ」

明子は息をはずませながら、今度ははっきりとかう答えた。

◆やさしい人、眼の人——海軍将校 ◆「息をはずませながら」——明子の興奮。◆明子は、はっきりと（彼女の率直性）「ノン・メルシイ」とフランス語で返答する。対して③では、逆にフランスの将校が、片言の日本語で、はっきりと「一しよに踊っては下さいませんか」と言った。この二つの「はっきり」にくくられた始めての舞踏が、

この作品の前半のピークを形成している。は・っ・き・り（すなわち明瞭、明快）という語に象徴されるように、前半のピークで強く印象づけられるものは、明瞭明敏な美少女明子の喜びをのせた軽快な動きであり、ならびに二人の幸福な一致である。

(33) するとその仏蘭西の海軍将校は、まだヴァルスの歩みを続けながら、前後左右に動いてゐるレエスや花の波

を縫って、壁側の花瓶の菊の方へ、悠々と彼女を連れて行った。さうして最後の一回転の後、其処にあった椅子の上へ、鮮に彼女を掛けさせると、自分は一旦軍服の胸を張って、それから又前のやうに恭しく日本風の会釈をした。

◆舞踏の終結。◆舞踏の（愛の、人生の）経験者、熟練者である海軍将校。◆水のイメージ——「レエスや花の波」◆菊の花。

(36) その後又ボルカやマズエルカを踊ってから、明子はこの仏蘭西の海軍将校と腕を組んで、白と黄とうす紅と三重の菊の飾の間を、階下の広い部屋へ下りて行った。

◆(35)と(36)との間に、一行の空白をはさむ。(36)から作品の舞台は、舞踏室に別れを告げ、階下の広間に移る。◆ワルツに続く、ボルカ、マズエルカ。明子は再三にわたって海軍将校と踊り、二人は急速に親密の度を増して、今やたがいに腕を組んで階下へ下りていく。この速やかな親密振り、とりわけ明子の急速度の成長振りには、どこか平穩でないもの、危ういものを感じられる。◆冒頭(2)で、舞踏室へと至る階段を、保護者である父親と並んで上って行った明子は、わずかの時間を経過して、今その同じ階段を、見ず知らずの異国の将校と腕を組んで下りて行く。◆菊の花。

(37) 此処には燕尾服や白い肩がしっきりなく去来する中に、銀や硝子の食器類に蔽はれた幾つかの食卓が、或は

肉と松露との山を盛り上げたり、或はサンドウィッチとアイスクリームとの塔を聳立てたり、或は又柘榴と無花果との三角塔を築いたりしてゐた。殊に菊の花が埋め残した、部屋の一方の壁上には、巧な人工の葡萄蔓が青々とからみついてゐる、美しい金色の格子があつた。さうしてその葡萄の葉の間には、蜂の巢のやうな葡萄の房が、累々と紫に下がつてゐた。

◆水の要素——アイスクリーム（氷った水）。◆菊の花。◆青のイメージ——青々としたぶどうのつる。さらには、紫のぶどうの房。

(38) 明子はその金色の格子の前に、頭の禿げた彼女の父親が、同年輩の紳士と並んで、葉巻きを啣へてゐるのに遇つた。父親は明子の姿を見ると、満足さうにちよいと頷いたが、それぎり連れの方を向いて、又葉巻を燻らせ始めた。

◆明子は、偶々父親に出会う。が、二人は距離を置いてすれ違うだけである。◆父親は、見ず知らずの青年と共にいる娘を眼にとめ、一人前に成長した娘の姿を認めて、一応「満足さうに」わずかにうなづいてみせる。しかし、それだけである。父にはもはや今更彼女に言うべき言葉もなければ、彼女を引きとめる力もない。彼は、見てはならぬものを見たかのように、すぐに娘から眼をそむけ、「連れの方を向いて、又葉巻を燻ら」すしかすべはない。

(39) 仏蘭西の海軍将校は、明子と食卓の一つへ行つて一しよにアイスクリームの匙を取った。

◆男と並んで食事を同じくすることは、単なる親愛以上のものを示す。明子は、無意識的には、すでに相手にすべてを許している（古今東西の作品における、しばしば性愛に先立つ食事の場面）。◆数多の御馳走の中から海軍将校が選ぶのは、水の人である彼にふさわしいアイスクリーム、氷った水であるアイス。熱をさます、冷たいアイス。これ迄明子にスポットをあてて展開してきた物語は、このアイスクリームを境にして、徐々にその重心を海軍将校の方へ移動する。と同時に、物語の色調は、明から暗へ、動から静へ、暖から冷へと移行していく。

(40) 彼女はその間も相手の眼が、折々彼女の手や髪や水色のリボンを掛けた頸へ注がれてゐるのに気がついた。それは勿論彼女にとって、不快な事でも何でもなかった。

◆眼の人、海軍将校。◆(41)では、明子はパートナーの視線を受けて誇らしく感じた。が、ここでは一歩進んで、彼女は相手の視線（眼による愛撫）を、快いものとして、快感として受入れている。◆「水色のリボン」——水の要素、青のイメージ。

(41) が、或刹那には女らしい疑ひも閃かずにゐられなかった。

◆恋による成長——十七歳の少女明子は、今や成熟した一個の女性と変らない。彼女の心理を写すために、ここに来て始めて用いられた「女らしい」という形容詞。

(42) そこで黒い天鵝絨の胸に赤い椿の花をつけた、独逸人らしい若い女が二人の傍を通った時、

◆黒いビロードの胸を飾る赤い椿の花。この何かまがまがしい妖艶なイメージが、本能的に明子の敵意をかき立て

る。◆嫉妬の炎を点ずる触媒としての赤い椿の花。

43 彼女はその疑ひを仄めかせる為に、かう云ふ感歎の言葉を発明した。

◆恋のもたらす知恵、創意工夫。

44 「西洋の女の方はほんとうに御美しうございますこと。」

海軍将校はこの言葉を聞くと、思ひの外真面目に首を振った。

「日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは——」

「そんな事はございませんわ。」

◆明子の吐く言葉はまことに「女らしい」ものである。——「西洋の女の方はほんとうに御美しうございますこと。（でも私の方がもっと美しく魅力的でしょう）」「そんな事はございませんわ。（勿論それはそうでしょう）」◆海軍将校の純情さ——明子の大人びたせりふに驚いて「思ひの外真面目に首を振」る彼は、経験者、熟練者であるにもかかわらず意外と、素直で純真な一面を持つ。なお、後段の7では、彼は「子供のやうに首を振って見せる」であろう。◆ヒビ割れ——将校の首を振るしぐさは、二人の幸福な一致にかすかなヒビ割れ（断絶）をもたらす。

45 「いえ、御世辞ではありません。その儘すぐに巴里の舞踏会へも出られます。さうしたら皆が驚くでせう。ワットオの画の中御姫様のやうですから。」

明子はワットオを知らなかった。だから海軍将校の言葉が呼び起した、美しい過去の幻も——仄暗い森の噴

水と凋^しれて行く薔薇との幻も、一瞬の後には名残りなく消え失せてしまはなければならなかった。

◆広がる断絶。明子は士官と共にワットオを話題にすることが出来ない。◆海軍将校のもたらす暗く、冷たいイメージ——「仄暗い森の噴水と凋れて行く薔薇」。◆明子が「初々^{はつはつ}しい薔薇」(9)であったのに対し、士官が一瞬喚起するバラは「凋れて行く薔薇」。◆士官が喚起する「仄暗い森」のイメージは、彼がしばらくして現実そこに立つ露台の彼方の、針葉樹の林を準備する。◆「一瞬の後には名残りなく消え失せてしまはなければならぬ」美しい幻は、後段、この作品のクライマックスに於いて夜空を色どる花火と相照応する。◆水——「森の噴水」。

(46) が、人一倍感じの鋭い彼女は、アイスクリームの匙を動かしながら、わずかにもう一つ残ってゐる話題に絶る事を忘れなかった。

◆断絶を埋めんとする明子。彼女のあせり。◆彼女は必死である。一瞬遠ざかった男を再び己のもとへ呼び戻そうと、物を食べながらも(「アイスクリームの匙を動かしながら」)別の話題を探そうとする。◆恋する女の機転、機知。

(47) 「私も巴里の舞踏会へ参って見たいでございますわ。」

「いえ、巴里の舞踏会も全くこれと同じ事です。」

◆二人の言葉の間には、深い断絶がある。士官の返答は、明子の熱を冷ます(水をかける)役目しか持たない。◆海軍将校(眼の人、傍観者)の、醒めた認識、苦い認識。

(48) 海軍将校はかう云ひながら、二人の食卓を繞^{めぐ}つてゐる人波と菊の花とを見廻したが、忽ち皮肉な微笑の波が瞳の底に動いたと思ふと、

◆眼の人である海軍将校の強調——「見廻」す、「瞳」。◆微笑の人、海軍将校。◆周りの人波がたちまち収縮して士官の瞳の中の細微な波と変る。現実^{じつ}はたちまち極度に縮少し、微細な一風景となる。今おそらく明子もまた、澄んだ瞳の中の、眇^{ひょう}とした一点に過ぎない。◆水のイメージ——「人波」、「微笑の波」。◆菊の花。

(49) アイスクリイムの匙^{さし}を止めて、

「巴里ばかりではありません。舞踏会は何処でも同じ事です」と半ば独り語^{ひとりごと}のやうにつけ加えた。

◆アイスクリイムの匙を動かしていた明子（動）に対し、同じその匙を止める海軍将校（静）。◆決定的な断絶。「独り語」めいた士官の言葉は、明子を対象としていない。彼女は一人とり残され、士官もまた一人、己れの孤独な想いの中に沈んで行く。◆氷った水——アイスクリイム。

(50) 一時間の後、明子と仏蘭西の海軍将校とは、やはり腕を組んだ儘^{まま}、大勢の日本人や外国人と一しょに舞踏室の外にある星月夜の露台に行んでゐた。

◆(49)と(50)の間には一行の空白がある。(50)から舞台は、舞踏室の外にある露台に移る。つまり、この作品の空間的背景は、鹿鳴館の階段↓舞踏室↓階下の広間↓露台、と進行する。◆露台の人、佇む人——海軍将校（対して、舞踏室の人——明子）。

⑥ 欄干らんかん一つ隔へだてた露台の向うには、広い庭園を埋めた針葉樹が、ひっそりと枝を交し合つて、その梢に点々と

鬼灯はうきでん提燈の火を透かしてゐた。しかも冷かな空氣の底には、下の庭園から上つて来る苔の匂や落葉の匂が、かすかに寂しい秋の呼吸を漂はせてゐるやうであつた。

◆冷氣——これ迄、予感として伏在していた冷氣が、ここに来て一気に噴出し、空間のすべてを覆いつくす。明から暗に、暖から冷に、動から静に、作品ははっきりと半転すると共に、物語の主役は明瞭に海軍将校に移る。◆舞踏室を埋めた菊の花に対し、今広い庭園を埋めるものは、ひっそりと枝を交した針葉樹。舞踏室の、菊の香りと爽やかな香水の匂に対し、ここに漂うのは、苔と落葉の匂。◆秋——(1)に十一月三日の夜と明記されていることによつて、また、くり返し言及される菊の花によつて、読者は時が秋であることを確かに知っているはずなのであるが、初々しいバラである明子が主導権を握る華やかな舞踏室の雰囲気、秋を、私たちはほとんど意識に上らせることはなかった。しかし今⑥に至つて、唐突に「冷かな空氣」に触れ、秋であること、しかも既に秋たけなわの晩秋であることに気づき、いささか愕然とした思いに打たれるのである。また事実、秋という語も、ここで始めて(「寂しい秋の呼吸」)用いられるのである。◆欄干のついた露台、広い寂しい庭につき出た露台は、船(海軍将校の船)を連想させないでもない。

⑦ が、すぐ後の舞踏室では、やはりレエスや花の波が、十六菊を染め抜いた紫縮緬ちりめんの幕の下に、休みなない動揺を続けてゐた。さうして又調子の高い管弦楽のつむじ風が、不相変あひかはらずその人間の海の上へ、用捨もなく鞭を加へてゐた。

◆逆説の接続詞「が」で始まる⑦は、⑥とことごとく対称的である。すなわち、⑥の自然に対する人工、静寂に対

する動揺ないしは狂騒、冷氣に対する熱氣。◆管弦楽——作品には、三度舞踏室の管弦楽についての言及がある。

一、「階段の上の舞踏室からは、もう陽気な管弦楽の音が、抑へ難い幸福の吐息のやうに、休みなく溢れて来るのであった。」(4)のこれは、明子の視点からのもの、明子の耳がとらえた管弦楽。二、「人波は、三鞭酒のやうに湧き立って来る、花々しい独逸管弦楽の旋律の風に煽られて、暫くも目まぐるしい動揺を止めなかった」(5)。この部分の描写は、明子の眼を借りたようになっているが、実は、語り手の視点からのものであろう。もっとも客観的な、中性的な立場からの記述。三、「調子の高い管弦楽のつむじ風が、不相変その人間の海の上へ、用捨もなく鞭を加へてゐた。」(6)のこの苛烈な描写は、(海という語からも明らかのように)海軍将校の視点からのもの。自然の静寂に向つて、黙念と露台に立った、士官の耳がとらえた管弦楽。◆菊のイメージ——「十六菊を染め抜いた紫縮緬の幕」。◆水のイメージ——「レネスや花の波」、「人間の海」。

(6) 勿論この露台の上からも、絶えず賑な話し声や笑ひ声が夜氣を揺つてゐた。まして暗い針葉樹の空に美し

い火花が揚る時には、殆人どよめきにも近い音が、一同の口から洩れた事もあった。その中に交つて立つてゐた明子も、其処にゐた懇意の令嬢たちとは、さつきから気軽な雑談を交換してゐた。

◆二人の乖離——海軍将校と並んで露台に立ちながらも、明子は、黙つて暗秋の庭に向いあつた彼とはまったくかわりなく、仲間の令嬢たちと雑談を交すだけである。

(6) が、やがて気がついて見ると、あの仏蘭西の海軍将校は、明子に腕を借した儘、庭園の上の星月夜へ黙然と眼を注いでゐた。

◆逆説の接続詞「が」で始まる⑤4は、⑤3と対称的である。すなわち、明子の饒舌に対する海軍将校の沈黙。なおちなみに、芥川ほど接続詞「が」を、愛用し頻用した作家は類がない。◆「あ・の・仏・蘭・西・の・海・軍・将・校」——連体詞あのは、はるかな距離を感じさせる。突然遠くに行ってしまった人。◆「明子に腕を借した儘」——海軍将校の想いは、もはや明子の上にはほとんどない。彼は腕をただ何となく、いわば惰性で（これは⑤0の「やはり腕を組んだ儘」にも言えるが）明子にゆだねているにすぎない。この腕は、ついに彼女を抱くことはないであろう。◆眼の人、海軍将校。

⑤⑨ 彼女にはそれが何となく、郷愁でも感じてゐるやうに見えた。そこで明子は彼の顔をそつと下から覗きこんで、「御国の事を思つていらつしやるのでせう。」と半ば甘えるやうに尋ねて見た。

◆遠く離れてしまった人を、女らしい媚に訴えてでも、己れのもとに引き戻そうと試みる明子。

⑤⑩ すると海軍将校は不相変微笑を含んだ眼で、静に明子の方へ振り返った。

◆微笑の人、眼の人、静かな人——海軍将校。

⑤⑪ さうして「ノン」と答へる代りに、子供のやうに首を振って見せた。

「でも何か考へていらつしやるやうでございますわ。」

「何だか当てて御覧なさい。」

◆「子供のやうに」首を振る海軍将校。人は他者の存在を忘れ、己れ一人の孤独な世界に沈潜している時、しばし

ば子供っぽい表情を取る。何のこだわりもない子供の世界に戻る。

58 その時露台に集まってゐた人々の間には、又一しきり風のやうなざわめく音が起り出した。明子と海軍将校とは云ひ合せてやうに話をやめて、庭園の針葉樹を圧してゐる夜空の方へ眼をやった。

◆眼の人、海軍将校。◆明子は、共に夜空に眼を注ぐことによつて、始めて士官の眼を幾分かは共有する。常に行爲の人であつた彼女も、幾分かは眼の人になる。が、眼の人になることは、60に示されるように、悲しい認識者、悲哀の観照者になることにほかならない。◆44のあたりから急速に広がった距離（断絶）によつて隔てられた二人は、共に夜空を仰ぐことにより、最後にかろうじて合体する。あるいは合体するかに見える。

59 其処には丁度赤と青との花火が、蜘蛛^{くも}手に闇^{はち}を弾きながら、将^{まさ}に消えようとする所であつた。

◆花火の赤に、何程かは明子の象徴を読み取れるかもしれない。青に、何程かは海軍将校の象徴を読み取れるかもしれない。◆二人の眼に映つたものは、束の間夜空に花開く花火の、それも今まさに消えようとする、燃えつきようとする最後の瞬間のものであつた。◆冒頭(3)の「人工に近い大輪の菊の花」から始まつて作品の随処にくり返し喚起された菊のイメージは、このクライマックスにおいて、夜の闇を弾いて大きく花開く、文字通り人工の大輪の菊の花、花火を準備するためのものでもあつた。

60 明子には何故かその花火が、殆ど悲しい気を起こさせる程それ程美しく思はれた。

◆明子の味う始めての悲哀。彼女は花火を、己れの恋の幻影に、一瞬燃え上つて今たちまち過ぎ去ろうとしてい

る恋の幻影に、何程かは重ね合せて見つめる故に、ことさらそれを悲しいまでに美しいものと感じるのである。

61) 「私は花火の事を考へてゐたのです。我々の生のやうな花火の事を。」

暫くして仏蘭西の海軍将校は、優しく明子の顔を見下しながら、教へるやうな調子でかう云った。

◆明子にとって花火が、束の間夢見た恋の幻影（一具体的事象）に重ね合されているのに対し、海軍将校にとって花火は、より一般的、抽象的な生の認識と重ね合されている。彼にとって、花火も、舞踏会も、明子も、すべてたちまちにして過ぎ去る生の幻影の一コマに過ぎない。◆「優しく明子の顔を見下しながら」——やさしい人、眼の人、海軍将校。◆「教へるやうな調子で」——人生の経験者、もろもろの海を経巡ってきた海軍将校。

62) 二

大正七年の秋であった。

◆「二」と銘打たれた短章は、「一」の後日談である。明治十九年十一月と大正七年秋、この間、実に三十二年間の空白がある。◆「二」は一種の額縁としての効果を果す。別の視点、時間的にはるかに離れた視点から改めて照射をうけて、「一」の世界は、茫々とした絶えざる時の流れの中からそこだけ切り離され、より鮮明な、純化された、独立した画像として定着する。額縁の中の、昔の美しい絵のように。逆様にのぞいた双眼鏡に映った、微細なしかし鮮明な画像のように。◆ごく短い後日談もしくはエピソードをつけ加えることによって、作品世界の重層化を計ることは、芥川の常套手段の一つでもある。後日談あるいはエピソードは、多くの場合時間的ないしは空間的

に遠く隔った視点に立つ。いくつかの例を上げれば、「虱」「奉教人の死」「トロッコ」「庭」「お富の貞操」「雛」等。

63 当年の明子は鎌倉の別荘へ赴く途中、一面識のある青年小説家と、偶然汽車の中で一しょになった。青年はその時網棚の上に、鎌倉の知人へ贈るべき菊の花束を載せて置いた。すると当年の明子——今のH老夫人は、菊の花を見る度に思ひ出す話があると云って、詳しく彼に鹿鳴館の舞踏会の思ひ出を話して聞かせた。青年はこの人自身の口からかう云ふ思出を聞く事に、多大の興味を感じずにはゐられなかった。

◆つつましやかに、ただH老夫人とのみ記された当年の明子は、四十九歳。◆H老夫人は、汽車で鎌倉に向う。対して「一」では、十七歳の少女明子は、馬車で鹿鳴館に向った。爾来三十数年。既に馬車は消え、鹿鳴館もまた存在しない。あの時、折々馬車の中で彼女に語しかけた父親も、おそらくはもはや故人なのであろう。今、彼女が、汽車の中で偶々同乗するのは、一面識のある青年作家。◆「一」の、三十二年前の、おびたしい大輪の菊の花、ならびに夜空に咲いた人工の大輪の菊は、すべて今小さな一箇の菊の花束に、収縮され、収束されて、網棚の上にひっそりと存在する。が、この小さな菊の花束は、老夫人を媒介として再び一挙に、数多の大輪の菊となつて、華やかな舞踏室の中に、秋の夜空に開花するのである。彼女の思ひ出の中で、追憶談の中で。

64 その話が終った時、青年はH老夫人に何気なくかう云ふ質問をした。

「奥様はその仏蘭西の海軍将校の名を御存知ではございませんか。」

するとH老夫人は思ひがけない返事をした。

「存じて居りますとも。Julien Viaud と仰有る方でございます。」

「では Lotu だったのでございますね。あの「お菊夫人」を書いたピエール・ロティだったのでございますね。」
青年は愉快な興奮を感じた。が、H 老夫人は不思議さうに青年の顔を見ながら何度もかう呟くばかりであった。

「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」

◆「一」では、終始「仏蘭西の海軍将校」とのみ記されて、一度もその名を明かされることのなかった士官は、三十数年を隔てて、始めて H 老夫人、すなわち明子の口から Julien Viaud と、その名を呼ばれる。はるか遠くの過去に向って、彼女は「ジュリアン・ヴィオ」と、懐かしくつぶやいて見せる。◆Julien Viaud とは、また何とも好ましい名ではないか。遠い青春に向って、老夫人が呼ぶにふさわしい名ではないか。ジュリアンという清新な音の響は、くり返し口に乘せれば、いつしか Jeune「ジュン」(若い、青春の)という意のフランス語)という語と共鳴し、一方ヴィオという幾分憂いを含んだ重い音は、ほかならぬ Vie「ヴィ」と、かつての士官の言葉「我々の生のやうな花火」の Vie と、たちまちごたまし合う。Julien Viaud, Jeune Viaud, Jeune Vie……◆「ジュリアン・ヴィオ」という名を口にすることによって、夫人は、「生」とつぶやいた士官を、夜空を焦がした大輪の菊を、如実に再体験するのに対し、一方青年作家は、ヴィオすなわちピエール・ロチ、すなわち小説「お菊夫人」の作者と、彼女の万感の想いとは無関係に、文学史的知識ないしは文学的ゴシップの範囲内で、夫人の話に興味を感じるだけである。彼の菊の花は、決して花開くことのない菊、つまり単なる本の題名(「お菊夫人」)の中の、活字一箇分の菊でしかない。◆最後の、この一寸としたすれ違い劇、軽い喜劇めいた筆致での幕引きは、中々に気がきいている。「一」の、感傷的で、いささかせつなく重くるしいラストシーンの後だけに、落語のオチめたこの幕引

きは、一服の清涼剤にも似て、読者の気持をほっとなごませてくれるのである。とまれ、夫人と青年作家と、それぞれの想いを乗せて、汽車は再び時間の中を、ひた走りに走り続ける。

参考文献（主として参照したものに限る）

- 『芥川龍之介全集、全十二巻』（岩波書店、昭和五十二年）
『芥川龍之介集』（日本近代文学大系三十八、角川書店、昭和四十五年）
『芥川龍之介論』（三好行雄著、筑摩書房、昭和五十一年）
『芥川龍之介、作家と作品』（宮坂覺編著、有精堂、昭和六十年）
『芥川龍之介必携』（三好行雄編、学燈社、昭和五十四年）
『作品論、舞踏会』（神田美子、國文學、昭和五十六年五月号）